

長野県埋蔵文化財ニュース

No. 5

1983. 8. 10

(財)長野県埋蔵 岡谷調査事務所 〒394 岡谷市郷田2-7260 ☎0266-24-0522
文化財センター 松塩筑調査事務所 〒399-07 塩尻市広丘高出1977 ☎02635-4-2150

五十畑遺跡



—大町市 社 曾根原—

(大町市教育委員会提供)

五十畑遺跡は高瀬川左岸段丘上の曾根原集落の南に広がる緩傾斜の耕地一帯に位置し、南に仁科神明宮を望むところにある。

圃場整備にともなう緊急発掘調査が、本年4月からおこなわれており、現在60%ほど進行している。その面積はおよそ2万㎡、70軒ほどの竪穴住居址、4軒の掘立柱建物址、5つの土壌墓が検出されている。その時代は奈良時代から平安末に及ぶが、大部分は平安時代後期に属する。

遺物は須恵器、土師器、灰釉陶器が大部分で、僅少だが緑釉陶器もある。器種は壺、甕、皿、碗、坏など

で、円面硯も出土している。皇宋通宝など5枚を出した竪穴住居址もある。

遺構としては、一つの墓壇(2m×1m長方形)から13枚の歯と一揃いの副葬品(須恵器瓶子1、土師器内黒坏4、うち一つに墨書、灰釉皿3)が出土したのは注目される。また焼失家屋のあとから炭化したトチ、ドングリ、小麦、桃のタネ、スモモのタネなども出土している。

平安時代中期に設置された仁科御厨の基盤となった農村は、次第にその姿を明らかにしはじめたようである。
(調査団長 篠崎健一郎)

埋蔵文化財センター2年目を迎えて

常務理事 三村 忠 幸

昨年は“慌しい一年であった。と云ってよいかと思
います。

法人発足初年度でもあり、発掘調査体制の確立、調
査対象地の調整等もあり、そのうえ、市町村埋蔵文化
財発掘調査技術指導のための職員派遣も重なり、しか
も、地域とのコミュニケーションを図る重要なことが
あったためではないかと考えております。

幸い、行政機関をはじめ関係機関、地域社会の方々
の深い御理解と御協力を頂くことができ、おおむね所
期の目的を達することができ感謝をしておるところで
ございます。

本年度は、2年目であり、種々な環境整備も図られ
てきている点で昨年よりは恵まれております。

発掘調査は、昨年に引き続き岡谷市内の遺跡を調査
し、終了させる予定ですが、一部地権者の方の御了解
が得られない場合は塩尻市の大原遺跡の調査に着手す
る予定であります。(別表参照のこと)

調査面積が約41,000㎡と昨年の3.2倍に増加したた
め、職員を事務1名、調査研究員6名の増員をし、総
勢19名の組織体制としました。

特に、職員の配置では、遺跡の周辺の地質学的背景
を明確にすることと遺跡内部の地層のつながりを明確
にして遺物、遺構の包含層を確認することをねらいと
して調査研究員に地質学専攻の職員を加えたのが目新

しいといえましょう。

ただ、市町村への技術指導に当たる職員の確保には
努力しましたが緊縮財政上果たせませんでした。

しかしながら、市町村職員を対象とした技術講習会
等を県とタイアップして計画し、技術面の向上を図る
よう検討しているところであります。



松塩筑調査事務所の開設(第1次建設分)

これらを通じ、いささかなりとも埋文センターの機
能化を図ることができればと願っている次第です。

なお、事務所については、4月に本部を県庁文化課
内に移し、塩尻市広丘高出に松塩筑調査事務所を設け
中央道長野線の先線対応と整理作業並びに従前の本部
にあった資料等の保管、活用を図っております。

どうか本年度も職員一同心を新たに資質の向上に努
め、文化財保護のため尽瘁しますので、よろしく御指
導を賜りたいと存じます。

(別表) 昭和58年度中央道長野線埋蔵文化財発掘調査計画

遺 跡 名	用地内面積	昭和58年度 調査対象面積
中島A(岡谷市)	9,880 ㎡	6,980 ㎡
中島B(")	3,690	1,590
柳海途(")	15,030	14,530
膳棚B(")	7,250	7,250
西林A(")	5,720	1,720
大 洞(")	2,910	2,910
大 原(塩尻市)	17,660	6,000
計	62,140	40,980

昭和58年度(財)長野県埋蔵文化財センターの組織と構成

○理 事 会

理 事 長	市 村 勲 (県教育長)
副理事長	木 鋪 巖 (県教育次長)
常務理事	三 村 忠 幸 (埋文センター事務局長)
理 事	前 田 豊 彦 (県企画局長)
"	太 田 勝 巳 (県高速道局長)
"	牧 内 哲 夫 (県文化課長)
"	大 澤 和 夫 (県考古学会長)
"	林 泰 章 (岡谷市長・市町村代表)
"	中 村 博 二 (長野市教育長・市町村教育 長代表)
"	林 茂 樹 (日本考古学協会員)

10名

監 事	青 木 了 (県会計局会計課長)
"	西 川 哲 雄 (県教委総務課長)

2名

○(財)長野県埋蔵文化財センター

事務局長 三村 忠 幸 (常務理事兼任)

庶務部長 丹羽 長 雄
主 事 熊谷由紀子

調査第1部長	神 村 透
調査研究員	小 菅 敏 男 井 口 慶 久
"	小 林 至 百 瀬 久 雄
"	唐 木 孝 雄 関 賢 司
"	小 柳 義 男 三 上 徹 也
"	市 沢 英 利 田 中 正 治 郎
"	原 明 芳 鈴 木 道 穂
"	百 瀬 長 秀 小 松 宏 昭

調査第2部長 河西 清 光

臨時職員 (堀 岳 雄・小林 雅 恵・花岡とよ子)
小口あや子・青木 秀 子

埋文施設紹介(3)



長野市立博物館

【建物の概要】 川中島の戦で有名な八幡原史跡公園の北側一角にあり、敷地面積は95,000㎡・建築面積5,110.4㎡である。博物館は1号館と2号館にわかれており、1号館は常設展示室(1・2階、1,693.6㎡)と第1収蔵庫(絵画・衣類・文書等、168.5㎡)があり、2号館は特別展示室(57.2㎡)・第2収蔵庫(民俗文化財関係、284.5㎡)・第3収蔵庫(考古資料・地質関係、327.7㎡)・天体学習室(251.7)・会議室(116.9㎡)があり、2階に理科教室センターが併設されている。

昭和55年建物・展示物工事着工、昭和56年9月23日開館、昭和57年建築設計において日本建築学会賞受賞。

【展示】 総合博物館としての機能をそなえているが内容的には、郷土色の強い歴史博物館的な色彩が強い。主題を「長野市の自然と生活」とし、長野盆地の生成の過程を最初に、そこに営まれた人々の生活の歴史と現状が、自然・考古・歴史・民俗に大別し、体系的に展開している。更に視聴覚機器や地震体験室などを副題をもとに設置し、分かりやすく印象づけられるように工夫している。

埋蔵文化財関係を描出すると、一応旧石器時代から平安時代までを通史的に展示している。ご存知のように長野盆地周辺では旧石器・縄文時代の遺跡が少なく、

良好な資料に乏しい。ただ上ヶ屋遺跡出土品を森嶋説に従い5文化系に分け展示してあるので、見ていただきたい。このコーナーではオオツノジカの種に近いヘラジカを、また「石器をつくる」のビデオを設置している。弥生・古墳時代では、当地が最初にして最大に発展した文化と位置付け、力を入れたコーナーでもある。出土検出資料をもとに、弥生時代の稲の収穫の様子をジオラマにし、復元住居を作り、中に実物資料を入れるなどして理解を助けている。古墳時代では、半島系墓制と考えられている現物そのままの合掌形石室の複製を作り、豪族の墓と権力を理解していただいている。遺物として川柳將軍塚古墳出土の鏡鑑類を展示してある。これは長らく布制神社の宝物庫に納められていたもので、是非実見していただきたい。なお、この他の土器類は原則としてセットとして展示している。奈良・平安時代の出土資料も多いのであるが、場所的においつめられたため、各種の代表的なものを陳列し、各時代の特異性を強調している。

【企画展】 現在第5回企画展「シナノから科野国へ」(7月17日～8月21日)を開催している。長野県内を中心に弥生時代末から大形前方後円墳出現までの時代設定をし、各地域の代表的な土器・金属器等を展示している。また展示方法も見所の一つであろうかと考えていますので、是非実見下さい。

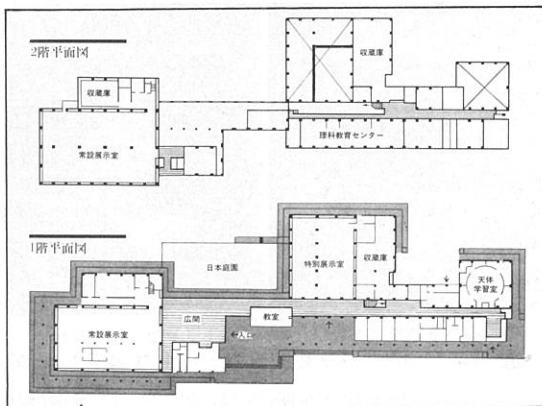
【文献等】 この他博物館の行事・調査研究・予算・入館等は『年報Vol.1』(500円)を、展示内容については『長野市立博物館案内書』(1000円)、第2回特別企画展図録『はにわの世界』(1000円)を参照下さい。

所在地 長野市小島田町八幡原史跡公園内

休館日 日・祝日の翌日、年末年始、1月の第4週

入館料 一般200円・高校生100円・小中学生50円

交通 川中島バス松代線(紙屋廻り)「八幡原」下車



発掘調査紹介

岡谷市上屋敷遺跡の調査

岡谷市教育委員会 小沢由香利

上屋敷遺跡は岡谷市長地横川に所在する。昭和43年の分布調査では縄文時代早期末から中期後半の土器片と石器がかなり広範囲にわたって発見された。昭和57年12月、58年5月には遺跡の東側部分での調査が行われ、平安時代の住居址2軒、縄文時代中期初頭の土壇群などが検出されている。



4号住居址全景

今回の調査は民間業者の宅地造成に伴う緊急発掘調査で昭和58年5～6月にかけて実施された。地点は遺跡の南側にあたり、住居址4軒と土壇4基が確認された。住居址はいずれも当地方においては検出例の少ない縄文時代早期末から前期初頭に比定し得るもので、伴出遺物としてはいわゆる「オセンベ」土器と呼ばれる細線文指痕薄手土器と縄文、撚糸文施文を主とする含繊維土器の出土をみた。4軒中1軒は近年の畑耕作による攪乱のため床面がわずかに残存する程度でプラン、規模等判然としないが他は1辺約4.5mの方形を呈すものが2、径約40mの円形を呈すものが1となっている。住居内には地床炉と2～4本の柱穴が検出された。また、炉付近に大型の焼けた平石を置いてあるのが特徴的である。石器は石鏃を中心に石錐、凹石などが数点出土している。この時期における住居内の伴出例としては量的に少ない。

土壇は時期、性格等検討中であるが、4基中1基は多量の炭化物と成人の人骨を伴うもので、火葬墓である可能性が高い。

上屋敷遺跡における時間的な広がりや文化内容の解明には今後の調査に寄せる期待が大きい。今回の調査では4軒の住居址に伴う「オセンベ」土器の繊維土器の出土を主に豊富な資料を得ることができた。これらの遺物のあり方は住居構造とともに縄文時代早期末から前期初頭の中部高地における文化様相、特に東西両文化の融合を考える際の好資料となるであろう。

栗林遺跡第7次発掘調査

金井 汲次

栗林遺跡は中野市大字栗林字北原ほかに位置し、千曲川の自然堤防上に12万㎡の広さにわたって所在する弥生中期を主体とする一大遺跡である。中部高地における弥生中期（栗林式）の標式遺跡として昭和35年2月11日に県史跡に指定され、遺跡の大部分は果樹園で保存状態は良好である。

第1次発掘調査は昭和23年秋、小野勝年・坪井清足氏等によって実施された。これ以降5次にわたって発掘調査が行われ、また、昭和54年夏には範囲確認調査が実施され、いずれも調査報告書が刊行された。

第7次発掘調査は、県史跡指定範囲内にある住宅（清水継雄氏）の全面改築にともなう現状変更で、事前に記録保存の調査を県教育委員会から指示され、去る4月9日から19日まで緊急発掘調査を実施した。旧宅180㎡は、建築時の礎石据付け等によって地層は攪乱されていたため、増築分の80㎡のみの調査となった。過去6回にわたる発掘調査に比して最も小規模の調査であった。



栗林遺跡第7次調査 土壇墓、上3号址・下4号址
遺構 中・小の土壇4（うち土壇墓3）、柱穴
状ピット8、焼土群2か所で、柱穴状ピットからは住

居のプランを把握することはできなかった。

第4号土壌は、西方へわずかに緩傾斜地に地表下40cmに長径1.7m、最大幅1.15mの長楕円形を呈し、粘土層(黄褐色)下に舟底形に掘りくぼめ、最深部は35cmを測る。仰臥屈葬後に覆土し、その表面に破碎した土器片をもって覆ったものと推定される。1・3号址は小形の土壌墓で、1号は長径1.3m、最大幅65cm、最深部25cm。3号は長径1.3m、最大幅60cm、最深部23cmの楕円形で、いずれも舟底形を呈し、埋葬後覆土上に少量の土器片を散布したものの如くである。

遺物 打製石鏃4、管玉1、土器片1,500点余の検出をみたが、大半は土壌墓にかかわりあいのもつものであった。打製石鏃はいずれも有柄の粘板岩質で粗製、2点のみが完形である。管玉は長さ7mm、直径3mm、孔径1.3mmで緑色を呈するが一部は破損欠失している。1号土壌墓の周縁から検出した。

土器片はいずれも栗林式で、4号土壌墓上のものは壺形が多くみられ、長頸が主体で、口縁は朝顔状に外反するものと、立ちあがつて袋状のものがあって、文様帯は頸部に大型沈線による平行文と山形文のものである。また口径14.5cm、器高4.5cmで口縁に5個のつまみ状突起のある浅鉢形土器は縄文晩期類似のもの一点の検出をみた。

下神遺跡、南田尻地籍の調査

松本市教育委員会 熊谷康治

下神遺跡は、松本市神林地区にあり東側に隣接する笹賀地区へもかかり広範囲に及んでいる。今回調査した南田尻地籍もこの遺跡の一部である。遺跡の北側を鎖川が流れ東へ約1kmのところで奈良井川と合流しており2つの川の扇状地の末端に位置している。

この調査は、神林地区の県営は場整備事業に先立つ緊急発掘調査であり、5月17日から6月12日まで実施した。以下調査の概要を述べたい。

調査範囲は約1,000㎡で、耕作土下約25~40mが検出面である。出土遺構は、すべて平安時代前半のもので、住居址が11軒、掘立柱の遺構址が4軒、土壌15、ピット多数、それに溝状遺構が3である。住居址の出



北側より見た調査地区

土状況は調査地区全面にわたり分布しているが切合っている住居址は、3号住と4号住のみであった。住居址の規模及び形態については、ほとんどが4m×4mの方形であるが10号住は5m×4m、9号住は4.6m×4mのやや長方形を呈する。検出は、黄褐色土中に掘込まれているので識別は容易であったが1軒だけプランが不明確のものがあつた。5号住以下の住居址は、床面が深く検出面から50~80cmあり、今回の特徴の一つである。かまどについては、西側に付くものが5軒、東側に付くものが5軒、不明が1軒であり壁外に張出して構築されているものが多くありこれも特徴の一つである。また柱穴がなくそれらしいピットを有する住居址もあるが確実ではない。ただ10号住の西及び北壁外に径20cmのピットが5ヶ1列に並んでおり10号住に關係のある柱穴とも思える。掘立柱の建物址は、4軒の内1号は掘方と中心に径20cmの柱根が明瞭に確認された。2号は南側に2本の補助柱穴があり斜めの柱があつたと思われる。出土遺物もほとんど平安時代前半のもので特にかまど付近に多く、須恵器では、坏、壺、甕等、土師器は、埴、甕、小形甕等が出土している。

以上のように、当遺跡は当初の予想を上回る結果で、現在も調査が進行している。同遺跡の他地籍の調査結果と合せると松本地方でも大規模な集落址となり当該時期の貴重な遺跡である。



4号住居址遺物出土

市町村だより (2)

飯田市における埋蔵文化財保護行政の問題点の一端

飯田市教育委員会社会教育課 小林正春

現在、飯田市の埋蔵文化財包蔵地数は886を数え、先土器時代から近代まで多岐にわたっている。その数は、遺跡範囲の把握方法、町村合併による行政範囲の広さ、あるいは具体的な姿として古墳の数が多いことなどにもよるが、一市町村の管理数としてはかなりの数といえる。

正直に言って飯田市において、これらの遺跡に対してその保護行政が円滑に機能していないのが実情である。現在、飯田市における埋蔵文化財保護行政は、教育委員会社会教育課文化係が行い、その体制としては係長1名、係員1名で、市が関係するほとんどの文化・芸術活動に一括対処している。端的にいう埋蔵文化財担当者とは1名であり、その1名も他の社会教育課実施事業に対応している。

近年、開発に伴う緊急発掘の数が急激に増加する傾向にある。これは一人飯田市に限らず、伊那谷の全市町村に対していえることと思うが、1つの大きな契機があつてのことである。それは、中央道西ノ宮線の開通である。中央道開通に伴う地域開発は当然予測されたことであり、いまさらの感がないでもないが、遺跡に対する開発（破壊）の進行はあまりにも急激であった。中央道開通による地域振興は、現代生活において不可欠のこととはいえ、市町村の埋蔵文化財保護機能をマヒさせるには十分であったといえる。

最近の発掘調査を要する大形の開発事業の多くは、国・県単位のものが主体であり、市町村単独では対応できかねる例が増加しており、調査実施にあたっての体制確保が困難である。調査体制確保にあたっては、県教委等のより積極的な援助を望むのが、市町村のいつわらざる気持ちである。

飯田市における具体例の1つとして、国道バイパス建設に伴う長期間（今年で7年目を迎えた）にわたる事業を実施し、内外から注目される面もあるが、それは遺跡そのものの持つ意味によるものであり、やむを得ないが、長期間にわたる1つの事業実施が、本来市

が実施すべき埋蔵文化財保護の諸活動（むやみな乱開発の防止、小規模な開発に伴う調査活動や、文化財保護の啓蒙・啓発活動等）が圧迫されているといえる。

飯田市の現状としては、埋蔵文化財保護行政の体制が不十分であることも、埋蔵文化財保護の基本的活動が円滑でない1つの理由ともいえる。行政全般の諸状況の中で体制の充実は困難ではあるが、近い将来において早急に考えなければならないことである。

一方、現状での体制確保が困難とはいえ埋蔵文化財の保護活動は、恒常的に実施しなければならないことはいうまでもなく、現在の体制の中でより良い方向を見い出さざるを得ない。具体的には、現状での社会教育課文化係の内部努力を柱として、市内16館の各公民館および各公民館主事との連携であるとか、学校教育との連携による埋蔵文化財に対する意識の掘り起し、またはその保護、保存に対する啓蒙・啓発の諸活動を実施することなどである。

いずれにしても、現在の飯田市の埋蔵文化財保護の姿勢は、飯田下伊那地区の範たるに不十分なことはいうまでもなく、地域の中心たりうる様その体制をはじめ諸点において改善のための努力をしなければならない。



恒川遺跡調査時の小学生見学風景

調査報告書の紹介

穴 場 I

諏訪市穴場遺跡第5次発掘調査報告書 昭和58年3月31日発行 諏訪市教育委員会刊（B5判 横組 本文42頁 図版12頁）

穴場遺跡は、諏訪盆地の北方に、霧ヶ峰西縁部より湖西に流れる角間川末端に発達する扇状地の左岸上方の緩斜面に位置する。本遺跡は過去4度の調査が行なわれており、今回は県道の拡幅工事に伴ない昭和57年8月～9月に亘って行なわれた第5次調査の報告である。発見された遺構は、住居跡7軒、集石1基、製鉄跡1基であり、住居跡はいずれも縄文時代中期のものである。特に注目されるのは18号住居跡のもつ、石棒、石皿、石碗、凹石、釣手土器の出土状況で、使用時の姿を彷彿とさせる形で検出された。また、17号住居跡からは梨久保B式とされる多量の土器が出土し、該期の研究に貴重な資料が追加されたといえる。

上 向 遺 跡

岡谷市市長地上向遺跡発掘調査概報 昭和58年3月25日発行 岡谷市教育委員会刊（B5判 横組 本文42頁 図版11）

上向遺跡は岡谷市最大の扇状地を作る横河川下刻の河岸段丘状台地の西岸丘陵上に位置する。本遺跡は市内最大級の遺跡として古くから知られており、本書は種々の開発に備え、昭和57年6月～9月に行なわれた事前調査の概報である。

縄文時代中期の住居跡13軒と小竪穴16基が検出されている。住居跡中8軒は中葉藤内期のものであり、それらは良好な切り合い関係を示していた。その結果、藤内Ⅰ・Ⅱ式がそれぞれさらに古・新に分離される可能性を呈示されており、停滞気味の該期土器研究に一石を投ずるものとなろう。また集落構成、石器組成等にかかわる豊富なデータも収録されている。

森將軍塚古墳

保存整備事業第2年次発掘調査概報 昭和58年3月30日発行 更埴市教育委員会刊（A4判 横組 本文22頁 図版11）

五ヶ年計画で実施されている森將軍塚古墳の保存整備事業の第2年度の調査の報告書である。

今回は、前方部を中心に調査が行なわれ、その中でいくつかの注目される遺構・遺物が発見された。とくに遺構では、前方部の竪穴式石室や、裾部に広がってつくられた小形埋葬施設（埴輪円筒棺 6基、組合式箱形石棺 25基）が、後円部墳頂の竪穴式石室との関係でどのような意味をもつのか注目されている。遺物では、裾部から発見された古式須恵器の大甕や、円筒埴輪、形象埴輪などが注目される。あわせて、史跡公園としての保存整備についても、述べられている。

丘中学校遺跡

塩尻市広丘野村丘中学校遺跡発掘調査報告書 昭和58年3月30日発行 塩尻市教育委員会刊（B5判 横組 本文69頁 図版8頁）

丘中学校遺跡は塩尻市の東と西を北流する田川と奈良井川の2河川によって形成された高位段丘の縁辺部に立地しており、高出遺跡群の中でも中核的な遺跡として知られており、過去3回調査され、合計23軒の平安時代住居跡が確認されている。今回の調査は丘中学校体育館建設にともなうもので、方形周溝墓1基、平安時代住居跡5軒、小竪穴21基、環状土器集積遺構が確認された。中でも方形周溝墓は松本平で2基目の発見であり、また祭祀的性格をもつ環状土器集積遺構も注目に値する。本書では前述の諸遺構に関する考察のほか、県内で確認された円形、方形周溝墓の集成、古墳～平安時代的大型住居跡の集成が行なわれている。

文化課だより

昭和58年度埋蔵文化財保護事業の概要、

本年度の埋蔵文化財保護事業については、下記のよう
に計画され、現在実施中です。

1. 県実施の保護事業

○県内生産関係遺跡分布調査

○中央道長野線埋蔵文化財包蔵地発掘調査——

（助長野県埋蔵文化財センターへ委託）

○埋蔵文化財包蔵地パトロール——長野県考古学
会へ委託

○重要遺跡選定作業

2. 市町村実施予定の国庫補助事業

（単位 千円）

補助事業名	実施 市町村	事業費 総 額	左 の 内 訳		
			国庫補助	県費補助	市町村負担
ア 発掘調査	20	41,070	20,531	6,155	14,384
イ 重要遺跡確 認緊急調査	4	16,000	9,500	2,850	6,650
ウ 遺跡詳細 分布調査	4	6,300	3,150	945	2,205
エ 出土遺物 保存処理	2	1,351	675	202	474
計	30	72,948	33,856	10,152	23,239

実施予定市町村（遺跡名）

ア. 小諸市（久保田）・佐久市（樋村ほか）・望月町
（浦谷Bほか）・更埴市（北稲付ほか）・丸子町
（稲葉北）・長門町（中道ほか）・東部町（鞍掛
ほか）・伊那市（若王）・駒ヶ根市（青木ほか）
・辰野町（芹田）・中川村（茶堂）・松川町（前
田）・大町市（五十畑）・高山村（四ッ屋）・長
野市（石川条理遺構ほか）・豊野町（北土井・
三水村（鐘山）・松本市（島内遺跡群ほか）・塩
尻市（君石）・野沢温泉村（岡の峯）

イ. 飯田市（恒川）・上田市（信濃国府跡）・松本市
（信濃国府跡）

ウ. 佐久市（市内）・下諏訪町（町内）・高山村（村
内）・川上村（村内）

エ. 飯田市（恒川）

埋文センターから

断層を掘る 中央自動車道西宮線内の調査で、諏訪
市荒神山遺跡が発掘され、縄文時代中期の住居址が断
層によって段差をなしていることが確認された。住居
に人が住んでいた時か、廃絶後かはわからないが、考
古学の時代の断層で、そうした大きな断層が生じたの
には地震もあったわけで、当時の人はどんな対応をし
たのかと興味をもった。

長野県史（考古部門）だより

考古資料編の編纂刊行状況はつぎのとおりです。

○遺跡地名表付県内文献目録 〈品切れ〉

56年3月刊行したが、昨年中に品切れ。希望者が多い
ので、資料編4冊の完結時に再募集の予定です。

○主要遺跡（北東信）〈残部僅少〉

57年12月刊行。158遺跡を取録、挿図690枚、総頁数855
頁で、見やすさと内容の充実に重点をおいて編集し
ました。お蔭で大変好評をいただき残部も僅かになっ
ておりますので、お早目に申込み下さい。

○主要遺跡（中南信）〈10月刊行予定〉

収録遺跡200箇所、頁数も1100頁となり、北東信より
約250頁増加します。目下編集に追込み中です。

○遺構・遺物（1冊）〈昭和59年度刊行予定〉

主要遺跡にもれた遺構・遺物も含めて、約250にわた
る諸項目に集成します。概説のほか分布図などもつけ
ます。ただいま編纂委員会の討議も大詰にきましたの
で、今夏からいよいよ本格的に取組みます。

○通史原始・古代Ⅰ）〈昭和62年度刊行予定〉

“土器型式名を一切使わぬ叙述。”原始～古代を木に竹
を接ぐようにならぬ。を目標にしております。

中央自動車道長野線内の調査が岡谷市内で始まり、
大久保遺跡でトレンチ内に極端な段差を検出し、それ
が断層であることを知った。早速に地学の専門家の指
導を得た。遺構をきっていないので明確な時期は不明
だが、奈良時代前後と考えられた。諏訪市教委が調査
した一時坂遺跡では弥生時代住居址が断層によってき
られているのが検出された。中島A遺跡で今までにな
い大きな段差をもつ断層が検出され、しかもそれを平
面的なつながりで見ることができた。縄文時代後期の
頃の断層と考えられ、諏訪地方では調査の対象の一つ
に断層が入ってきた。

地区割について 中央道遺跡調査団の頃、遺跡名を
アルファベットの記号化を考え、遺跡名から2文字、
地形の中における調査部の位置から1文字をとって、
3文字によって表現することにした。下伊那・上伊那
ではそれをとってきたが、諏訪に入って、諏訪地方を
しめすためにSをつけて、4文字で表現することにな
った。この記号が遺構図や遺物に記入されている。

◇ ◇ ◇

あとがき 埋文ニュース5号をお届けします。本年
4月の人事移動で埋文センターも移動、増員などあり
編集係も変り、戸惑いながらやっております。従来の
編集方針を今後も続けてまいります。できるだけ市
町村の情報を多く掲載したいと思いますのでご協力
をお願いします。（印刷 ほおずき書籍㈱）